「みやま風景回廊」をつくる

宇都宮大学名誉教授 / 農林水産省農村景観応援団
藤本 信義

もう40年ほど前、栃窪の集落移転先を訪れたのが白鷹町を知るきっかけでした。その後、私は大学研究室の助手として飯豊町のまちづくりに深く関わることになるのですが、白鷹町は同じ西置賜郡に位置しているせいか、今回初めて訪れた深山の人々にも何となく親近感を覚えています。ただ、ほとんどの方が「樋口さん」で、名前を覚えないと誰かわからないことには驚きです。

今後の実践活動にあたり、深山の風景づくりを進める際の基本的な考え方を述べてみたいと思います。

●「のどか」な深山の印象

深山には平成20年夏と冬の２回訪れ、いずれも「のどか村」のお母さんたちの地場産手料理を堪能しました。季節に応じた献立があるように、深山郷の四季の風景にはそれぞれの楽しみ方があるはずです。深山という地名でありながら、山並みがそれほど迫っているわけでもなく、田畑に囲まれた80戸の集落は閉鎖的な感じのしない、まさに「のどか村」という印象です。この恵まれた自然と由緒ある行事や歴史を、訪れる人たちに四季折々のもてなしとして味わってもらえる工夫が、ワークショップ「深山講」で検討されたのではないかと推察できます。実際に現地を案内してもらうと、深山観音堂や深山和紙のほかはとびきりの逸品があるわけでもないのですが、むらの暮らしを支え、人々が大切にしてきた諸々のモノ、コトが浮かび上がってきて、これらを少しずつ料理すれば「いきいきした深山郷」づくりは充分期待できるのではないかと思います。

● むらの内外をつなぐ「伝統工芸村エリア」

いきいき深山郷の核をなすのは、古民家を再築した宿泊施設「のどか村」をはじめ、蕎麦打ち（体験）小屋、登り窯を備えた深山工房、深山和紙センターから成る「伝統工芸村エリア」といってよさそうです。「のどか村」は集落内の各家庭が人寄せや宿泊に使ったり、さまざまな行事にも利用されるなど、むらの内外にわたって有効活用されている施設です。

風景づくりの観点から「伝統工芸村エリア」の全体配置構想（マスタープラン）を、できるだけ多くの住民参加により創る必要があるということです。行事広場、駐車場、庭園（植栽）、コウゾ畑、案内板、照明、敷地境界等々のデザインを、思いつきではなく、見通しを立てて計画すべきです。

冬季は雪の処理だけでも一苦労だと思いますが、それ以外の季節には「伝統工芸村エリア」全体に「うるおい」を与える(心がなごむ)工夫が求められます。

● 深山観音堂まわりに磨きをかける

深山観音堂は、深山郷のシンボル的存在と思われます。多少の不並びなど気にもかけずに積まれた長い石段は、参拝の心の準備をするに充分な時間と空間を演出していてみごとです。石段脇に流れる水の音が、境内の静けさを却って深めているようです。ここ深山郷は歩いているとあちこちから水音が聞こえてきます。この音の風景(サウンドスケープ)を是非大切にして、新たに落差溝や水車等で水音を生み出すことも考えられるでしょう。

観音堂を久ぶりに訪れて、葺き替えられた屋根の形が変わっていることに気づきました。本来の姿であったのか、国指定の重要文化財であるだけに気になります。
参拝者がお堂に貼り付けた「千社札」は、端正なお堂の表情を汚しているので、別の場所に参拝の印を残す場を設ける必要があります。

むらではお堂まわりの樹木を伐採することに決めたとのことで、深閑とした境内の雰囲気は、まわりの古木たちによって生み出されていると言えますが、お堂の茅葺き屋根にとっては日差しが届かなければ朽ちるのも早く、住民納得の措置と思われます。後にはモミジ植栽の案が出ているとのことで、由緒深い観音堂に磨きをかける風景づくりを望みます。

● 風景はモノ、コト、ヒトの組合せ―「つなぐ」ことが大切

深山郷には、風景づくりの資源がたくさんあります。背後に朝日連峰がめぐる頭殿山の眺め、架け替え予定の橋上から見た実渕川の流れなどがワークショップ「深山講」でお薦めのポイントに挙げられています。他にも、一本杉、モクレン、クルミの木といった巨木・古木がむらの風景にアクセントを与えています。道を行くときの目印になるという意味で「ランドマーク」と言われますが、草木塔、庚申塚、馬頭観音、お地蔵様、史跡類などもランドマークに数えられます。また、むらの土地利用の大部分をなす農地の風景は、季節変化を最も端的に示しています。それらを「つなぐ」のが「みやま風景回廊」です。白鷹町は点在する古典桜を称して、「さくら回廊」と名づけています。深山郷は桜の季節だけでなく、一年を通してのどかな風景を楽しむことのできる回廊としたいものです。

風景は、モノ、コト、ヒトの組合せによる全体像であるということです。今回の計画では、7つの提案がまとめられています。そのひとつである「のどかな風景を創る」だけが風景づくりではなく、内容のどれもが、深山郷の風景づくりにつながっているのです。「むらの風景は、むらに住んでいる人々の器量を示す」ことをお忘れなく。